



日汉对照
全译本

坊っちゃん 哥儿

[日] 夏目漱石 著 林少华 注译



中国宇航出版社

013071459

H369.4

102-2



坊っちゃん 哥儿

[日] 夏目漱石 著 林少华 注译



北航

C1678668



中国宇航出版社

·北京·

H369.4

102-2

004170810

版权所有 侵权必究

图书在版编目(CIP)数据

哥儿：日汉对照全译本 / (日) 夏目漱石著；林少华注译. — 北京：中国宇航出版社，2013.6
(世界文学经典珍藏馆)
ISBN 978-7-5159-0419-1

I. ①哥… II. ①夏… ②林… III. ①日语—汉语—对照读物②中篇小说—日本—现代 IV. ①H369.4:I

中国版本图书馆CIP数据核字(2013)第099165号

策划编辑 于 慧 封面设计 文道思
责任编辑 刘 莹 刘东雪 责任校对 满新茹

出版 中国宇航出版社
发行
社址 北京市阜成路8号 邮 编 100830
(010)68768548

网 址 www.caphbook.com

经 销 新华书店

发行部 (010)68371900 (010)88530478(传真)
(010)68768541 (010)68767294(传真)

零售店 读者服务部 北京宇航文苑
(010)68371105 (010)62529336

承 印 北京中科印刷有限公司

版 次 2013年6月第1版 2013年6月第1次印刷

规 格 880×1230 开 本 1/32

印 张 9 字 数 218千字

书 号 ISBN 978-7-5159-0419-1

定 价 26.80元

本书如有印装质量问题，可与发行部联系调换

夏目漱石和他的作品

(译序)

林少华

除了对职业教师，日本人一般不以“先生”称呼别人，对文学家也是这样。但对夏目漱石是个例外，习惯上称为“漱石先生”，大约同我们中国人习惯上称鲁迅为“鲁迅先生”相若。较之客气，这里边显然含有尊之为师的敬意。实际上，夏目漱石在日本人心目中的地位也同鲁迅在中国人心目中的地位差不多。但鲁迅研究，无论在中国还是在日本都属于显学。不仅《鲁迅全集》被一篇不少地译成了日文，《故乡》还被收入了日本中学“国语”(语文)教科书——不知道鲁迅先生的日本人估计占不到多数。但相比之下，夏目漱石在中国就没有那么幸运了(当然个中原因多多，很难单纯比较)。人们或许知晓川端康成和大江健三郎，但知道漱石的，除了大学中文、外文系师生和文学爱好者，恐怕不会有多少人。

然而毫无疑问，漱石是日本近代文学史上一座卓然特立的高峰。他活跃的二十世纪初期(明治与大正之交)，日本文坛可谓群星灿烂。就小说家来说就有森鸥外、岛崎藤村(亦是诗人)、田山花袋、正宗白鸟、永井荷风等人。但作品至今仍为人津津乐道的，说得夸张些，恐怕唯漱石一人而已。难怪被日本人称为“国民大作家”，其头像赫然印在日本千元纸钞的正面，人们几乎

无日不同这位大作家“打交道”。

夏目漱石，原名夏目金之助，一八六七年（庆应三年）生于江户（现东京）一小吏家庭，十四岁入二松学舍系统学习“汉籍”（中国古籍），浸润了东方美学观念和儒家伦理思想，奠定了日后文学观和人生观的基础。写“汉诗”（汉语古诗）是其终生爱好和精神寄托。“漱石”之名，即出自《晋书·孙楚传》中“漱石枕流”之句。二十一岁就读于第一高等中学本科，二十三岁入东京帝国大学（现东京大学）英文专业学习。其间因痛感东西方文学观的巨大差异而陷入极度的精神苦闷之中。一八九五年赴爱媛县松山中学任教，为日后《哥儿》的创作积累了素材。翌年转赴熊本县任高等中学讲师。一八九九年赴英国留学三年，学习英国文学和教学法。回国后先后在东京第一高等中学和东京帝大讲授英文，同时开始文学创作，发表了长篇小说《我是猫》，并一举成名。一九〇七年进入朝日新闻社任小说专栏作家，为《朝日新闻》写连载小说，一直笔耕不辍，直至一九一六年（大正五年）因胃溃疡去世。是年仅四十九岁。

漱石从事文学创作的时间并不很长，从三十八岁发表《我是猫》到四十九岁去世，也就是十年多一点时间，却给世人留下了大量有价值的作品。他步入文坛之时，自然主义文学已开始在日本文坛流行，很快发展成为文坛主流。不过日本的自然主义不完全同于以法国作家左拉为代表的欧洲自然主义，缺乏波澜壮阔的社会场景，缺乏直面现实的凌厉气势，缺乏粗犷遒劲的如椽文笔，而大多囿于个人生活及其周边环境的狭小天地，乐此不疲地直接暴露其中阴暗丑恶的部位和不无龌龊的个人心理，开后来风靡文坛（直至今日）的“私小说”“心境小说”的先河。具有东西方高度

文化素养的漱石从一开始便同自然主义文学背道而驰，而以更广阔视野、更超拔的高度、更有责任感而又游刃有余的态度对待世界和人生，同森鸥外一并被称为既反自然主义又有别于“耽美派”和“白桦派”的“高踏派”“余裕派”，是日本近代文学真正的确立者和一代文学翘楚。随着漱石一九一六年去世及其《明暗》的中途绝笔，日本近代文学也就落下了帷幕。

以行文风格和主要思想倾向划线，作品可分为明快、“外向”型和沉郁、“内向”型两类。前者集中于创作初期，以《我是猫》（1905）、《哥儿》（1906）为代表，旁及《草枕》（1906）和《虞美人草》（1907）。在这类作品中，作者主要从理性和伦理的角度对现代文明提出质疑和批评。犀利的笔锋直触“文明”的种种弊端和人世的般般丑恶。语言如风行水上，流畅明快；幽默如万泉自涌，酣畅淋漓；妙语随机生发，警句触目皆是，颇有嬉笑怒骂皆成文章之势。后者则分布于创作中期和后期，主要作品有《三四郎》《其后》《门》（前期三部曲）和《彼岸过迄》《行人》《心》（后期三部曲），以及绝笔之作《明暗》。在这类作品中，作者收回伸向社会的笔锋，转而指向人的内心，发掘近代人内心世界的不安、烦恼和苦闷，尤其注重剖析近代知识分子的“自我”、无奈与孤独，竭力寻觅超越“自我”、自私而委身于“天”的自在和谐之境（“则天去私”），表现出一个作家应有的社会责任感和执著、严肃的人生态度。

这里，从两类作品中各选一部代表作。《哥儿》通过一个不谙世故、坦率正直的鲁莽哥儿踏入社会后同周围俗物展开的种种戏剧性冲突，辛辣而巧妙地讽刺了社会上的丑恶现象，鞭挞了卑鄙、权术和虚伪，赞美了正义、直率和纯真。行文流畅，节奏明

快，形象鲜明。通篇如坂上走丸，一气流注，而寓庄于谐，妙趣横生，至今仍是脍炙人口的作品，实为日本近代文学作品中不可多得的佳作。《心》则多少带有现今所说的推理色彩。“我”认识了一位“先生”，后来接得“先生”一封长信（其时“先生”已不在人世），信中讲述了“先生”在大学时代同朋友K一同爱上房东漂亮的独生女儿。“先生”设计使K自杀，自己如愿以偿。但婚后时常遭受良心和道义的谴责，最后也自杀而死。小说以徐缓沉静而又撼人心魄的笔致，描写了爱情与友情的碰撞、利己之心与道义之心的冲突，凸现了日本近代知识分子矛盾、怅惘、无助、无奈的精神世界，同时提出了一个严肃的人生课题。这部长篇可以说是漱石最为引人入胜的作品，至今仍跻身于日本中学生最喜欢读的十部作品之列。说得极端一点，假如没有《哥儿》和《心》，漱石能否“活”到今天还真是个疑问。

日本小说家中，较之诺贝尔文学奖获得者川端康成和大江健三郎，我更喜欢另外两个人：一个就是夏目漱石，一个是当代的村上春树。差不多二十年前在北国读研究生的时候，漱石全集便读了一集又一集；而村上的小说，近年来则译了一本又一本。粗想之下，两人之间虽时隔八十余年，但确有若干共同点。一是态度的认真与坦诚。两人都认真对待人生和社会，不伪善，不矫情，不故弄玄虚，不掩饰自己。二是笔调的幽默和机警。一些作品都富于理性的、机智的、有教养的幽默感。外国有人称村上春树为“当代的夏目漱石”，想必主要着眼于这一点。三是描写对象大多都是都市里的小人物尤其是知识分子，都以传达其孤独、无奈、充满失落感的心态见长，而且两人同样是游离于文坛主流

而独树一帜、别开生面的作家。

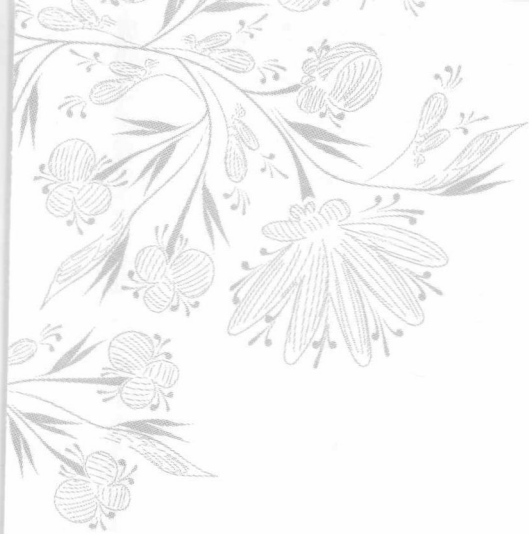
正因为喜欢，多年来一直想将适合日语专业大学生课外阅读的《哥儿》和《心》这两篇以日汉对译形式另行付梓。而今承蒙中国宇航出版社好意，终于得遂夙愿。人生快事，教师之乐，莫过于此。

关于注释，主要根据本科二三年级的学力就词汇和语法之偏难者附以底注。释义参考了角川书店昭和49年版“日本近代文学大系”之《夏目漱石集》中的注释和有关辞书，亦多少有我的理解。包括译文在内，未必精当，谨资参考，欢迎指正。

最后我想说的是，此书二〇〇八年出了平装本，转眼五年过去。今天您手中的精装本无论译注内容还是版式设计都较平装本有了明显改进。尤其译注方面，责任编辑刘东雪的一丝不苟使之避免了不少疏漏或欠妥之处，在此谨致诚挚的谢意。如果说一本书是一只小船，那么出版社就是一座码头。现在，小船终于离开码头扬帆起航了。但愿这只小船带给您一丝惊喜、一分收获。

2013年3月25日于窥海斋

时青岛垂柳初绿迎春花开



目 录

哥 儿…… 179	坊 っ ち ゃ ん…… 1
-----------------	------------------------------



坊っちゃん



P 181

親譲り^{おやゆず}①の無鉄砲^{むてっぽう}②で小供の時から損ばかりしている。小学校に居る時分^{じぶん}学校の二階から飛び降りて一週間ほど腰を抜かした事がある。なぜそんな無闇^{むやみ}③したと聞く人があるかも知れぬ。別段^{べつだん}④深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談^{じょうだん}に、いくら威張^{いば}っても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫^{よわむし}や一い。と囃^{はや}したからである。小使^{こづかい}に負ぶさって帰って来た時、おやじが大きな眼^めをして二階ぐらいから飛び降りて腰を抜かす奴^{やつ}があるかとい云ったから、この次は抜かさずに飛んで見せますと答えた。

親類のものから西洋製のナイフを貰^{もら}って奇麗^{きれい}な刃^はを日に翳^{かざ}して、友達に見せていたら、一人が光る事は光るが切れそうもないと云った。切れぬ事があるか、何でも切ってみ

① 親譲り：父母留下的（东西），父母的遗传，得自父母的。

② 無鉄砲：鲁莽，直性子，冒失，炮筒子脾性。

③ 無闇：胡闹，乱来，蛮干；分外，格外，特别。此处作名词用。

④ 別段：（副）特别，格外。下接否定式。

せると受け合った。そんなら君の指を切ってみろと注文^{ちゅうもん}したから、何だ指ぐらいこの通りだと右の手の親指^{こう}の甲をはすに切り込んだ。幸^{さいわい} ナイフが小さいのと、親指^{かた}の骨が堅かったので、今だに親指は手に付いている。しかし創痕^{きずあと}は死ぬまで消えぬ。

庭を東へ二十歩^{つく}に行き尽すと、南上がり^{つく}にいささかばかりの菜園^{まんなか}があつて、真中^{くり}に栗の木が一本立っている。これは命より大事な栗だ。実の熟する時分は起き抜けに背戸^{せど}を出て落ちた奴を拾^{やまし}ってきて、学校で食う。菜園^やの西側が山城屋^やという質屋^{しちや}①の庭続きで、この質屋^{かん}に勘太郎^{たろう}という十三四^{せがれ}の倅が居た。勘太郎は無論弱虫^{くせ}である。弱虫の癖^{くせ}に四つ目垣^{くせ}を乗りこえて、栗^{ぬす}を盗みにくる。ある日の夕方折戸^{おりど}の蔭^{かげ}に隠れて、とうとう勘太郎^{つら}を捕まえてやった。その時勘太郎^には逃げ路^{みち}を失つて、一生懸命^{むこ}に飛びかかつてきた。向うは二つばかり年上である。弱虫だが力は強い。鉢^{はち}の開いた^{はち}②頭を、こっちの胸^あへ宛^あててぐいぐい押^おした拍子^{ひょうし}に、勘太郎^おの頭^{ひょうし}がすべって、おれの^{あわせ} 袷^{そで}の袖^{そで}の中^{そで}にはいった。邪魔^{じゃま}になつて手が使えぬから、無暗^ふに手を振^ふったら、袖^{そで}の中^{そで}にある勘太郎^{かた}の頭^{かた}が、右左へぐらぐら^{なび}靡^{なび}いた。しまい^{なび}に苦し^{なび}がって袖^{そで}の中^{そで}から、おれの二^{うで}の腕^{うで}へ食^{うで}い付^{うで}いた。痛^{うで}かったから勘太郎^{あしがら}を垣根^{たお}へ押^{たお}しつけておいて、足搦^{あしがら}をかけて向う^{たお}へ倒^{たお}してやった。山城屋^{たお}の地面^{たお}

① 質屋：当铺，典当业。

② 鉢の開いた：鉢を開く，托鉢化缘。此处应指头盖骨宽大。

は菜園より六尺がた低い。勘太郎は四つ目垣を半分崩^{くず}して、自分の領分^{まつさかさま}へ真逆様に落ちて、ぐうと云った。勘太郎が落ちるときに、おれの袷^{かたそで}の片袖がもげて、急に手が自由になった。その晩母が山城屋に詫^わびに行つたついでに袷の片袖も取り返して来た。

この外いたずらは大分やった。大工の兼公^{かねこう}と肴屋^{さかなや}の角^{かく}をつれて、茂作^{もさく}の人参^{にんじん} 畠^{はたけ}をあらした事がある。人参の芽^でが出揃^{そろ}わぬ^{ところ} 处^{わら}へ藁^しが一面に敷いてあったから、その上で三人が半日相撲^{すもう}をとりつづけに取つたら、人参がみんな踏^ふみつぶされてしまった。古川^{ふるかわ}の持っている田圃^{たんぼ}の井戸^{いど}を埋^うめて尻^{しり}を持ち込まれた^①事もある。太い孟宗^{もうそう}の節を抜いて、深く埋めた中から水が湧^わき出て、そこいらの稲^{いね}にみずがかかる仕掛^{しかけ}^②であつた。その時分はどんな仕掛か知らぬから、石や棒^{ぼう}ちぎれをぎゅうぎゅう井戸の中へ挿^さし込んで、水が出なくなつたのを見届けて、うちへ帰つて飯を食つていたら、古川が真赤^{まっか}になつて怒鳴^{どな}り込んで来た。たしか罰金^{ばっきん}を出して済んだようである。

おやじはちつともおれを可愛^{かわい}がってくれなかつた。母は兄ばかり最^{ひいき}真^ま^③にしていた。この兄はやに^④色が白くつて、芝居^{しばい}の真似^{まね}をして女^{おんな} 形^{がた}になるのが好きだつた。おれを見る

① 尻を持ち込まれた：尻を持ちこむ，前来追究責任，要求善后处理。

② 仕掛：此处意为装置，结构，机关，程序。

③ 最真：偏爱，偏心，格外宠爱。

④ やに：（副）此处似乎为いやに之略，异常，反常，非常，格外。

度にこいつはどうせ碌なものにはならないと、おやじが云った。乱暴で乱暴で行く先が案じられると母が云った。なるほど碌なものにはならない。ご覧の通りの始末である。行く先が案じられたのも無理はない。ただ懲役^{ちやうえき}に行かないで生きているばかりである。

母が病気で死ぬ^{にさんち}二三日前台所で宙返り^{ちゆうがえ}①をしてへっつい^{あばらばね}の角で肋骨^うを撲って大いに痛かった。母が大層怒って、お前のようなものの顔は見たくないと云うから、親類へ泊り^{おこ}に行っていた。するととうとう死んだと云う報知^{とま}が来た。そう早く死ぬとは思わなかった。そんな大病なら、もう少し大人^{おとな}しくすればよかったと思って帰って来た。そうしたら例の兄がおれを親不孝^{おやふこう}だ、おれのために、おっかさんが早く死んだんだと云った。口惜^{くや}しかったから、兄の横っ面^{よこつら}②を張って大変叱^{しか}られた。

母が死んでからは、おやじと兄と三人で暮^{くら}していた。おやじは何にもせぬ男で、人の顔さえ見れば貴様^{だめ}は駄目駄目だと口癖のように云っていた。何が駄目なんだか今に分からない。妙なおやじがあつたもんだ。兄は実業家になるとか云ってしきりに英語を勉強していた。元来女のような性^{しょう}分^{ぶん}で、ずるいから、仲がよくなかった。十日に一遍^{いっぺん}ぐらいの割で喧嘩をしていた。ある時将棋^{しょうぎ}をさしたら卑怯^{ひきよう}な待駒^{まちごま}

① 宙返り：翻跟斗，翻筋斗，在空中旋转身体。

② 横っ面：亦作よこつら，側臉，側面。横っ面を張る，打嘴巴，耳光。

をして、人が困ると嬉し^{うれ}そうに冷やかした。あんまり腹が
立ったから、手に在った飛車を肩間^{みけん}へ擲^たきつけてやった。
肩間が割れて少々血が出た。兄がおやじに言^い付けた。おや
じがおれを勘当^{かんだう}①すると言^い出した。

その時はもう仕方がないと観念して先方の云う通り勘
当されるつもりでいたら、十年来召し使っている清^{きよ}とい
う下女が、泣きながらおやじに詫^{あや}まって、ようやくおや
じの怒^{いか}りが解けた。それにもかかわらずあまりおやじを
怖^{こわ}いとは思わなかった。かえってこの清と云う下女に氣
の毒であった。この下女はもと由緒^{ゆいしよ}のあるものだったそ
うだが、瓦解^{がかい}②のときに零落^{れいらく}して、つい奉公^{ほうこう}までするよう
になったのだと聞いている。だから婆^{ばあ}さんである。この
婆さんがどういう因縁^{いんえん}③か、おれを非常に可愛^{あい}がってくれ
た。不思議なものである。母も死ぬ三日前^{あいそ}に愛想^{あいそ}をつか
した——おやじも年中持て余している——町内では乱暴
者の悪太郎と爪弾^{つまはじ}きをする——このおれを無暗^{ちんちよう}に珍重^{ちんちよう}
してくれた。おれは到底^{とうてい}人に好^たかれる性^{たち}でないとあきら
めていたから、他人から木の端^{はし}のように取り扱^{あつか}われるの
は何とも思わない、かえってこの清のようにちやほや④
してくれるのを不審^{ふしん}に考えた。清は時々台所で人の居ない

① 勘当：原指断绝主仆、师徒、父子关系，后来专指断绝父子关系。

② 瓦解：瓦解。此处特指德川幕府的瓦解即明治维新。

③ 因縁：现在多作いんねん。

④ ちやほや：（副・サ変他）捧，奉承，宠爱，溺爱。

時に「あなたは真^まっ直^すでよいご気性だ」と賞^ほめる事が時々あった。しかしおれには清の云う意味が分からなかった。好^いい気性なら清以外のものも、もう少し善くしてくれるだろうと思った。清がこんな事を云う度におれはお世辞は嫌いだと答えるのが常であつた。すると婆^なさんはそれだから好^いいご気性ですと云つては、嬉し^{ほこ}そうにおれの顔を眺めてゐる。自分の力でおれを製造して誇^{ほこ}ってるように見える。少々気味がわるかつた。

母が死んでから清はいよいよおれを可愛^{こどもごころ}がつた。時々はお小^{こどもごころ}供^{ごころ}心^{ごころ}になぜあんなに可愛^{こどもごころ}がるのかと不審に思った。つまらない、廃^やせばいいのにと考えた。気の毒だと思つた。それでも清は可愛^{こどもごころ}がる。折々は自分の小^{こづか}遣^{きんづば}いで金^{きんづば}鑄^{づば}や紅^{こうばい}梅^{やき}焼^{やき}を買^かってくれる。寒^さい夜^やなどはひそかに蕎^{そば}麦^こ粉^こを仕入れておいて、いつの間にか寝^ねている枕^{まくら}元^{もと}へ蕎^{そば}麦^こ湯^{とう}を持^もつて来^きてくれる。時には鍋^{なべ}焼^{やき}饅^う飴^{どん}さえ買^かつてくれた。ただ食^くい物^{つた}ばかりではない。靴^{くつ}足^た袋^びももらつた。鉛^{えん}筆^ぴも貰^{もら}つた、帳^{ちやう}面^{めん}も貰^{もら}つた。これはずっと後の事であるが金を三^{さん}円^{えん}ばかり貸^かしてくれた事さえある。何も貸^かせと云^いつた訳^{わけ}ではない。向^{むか}うで部^ぶ屋^やへ持^もつて来^きてお小^こ遣^{づか}いがなくしてお困^こりでし^しょう、お使^しいなさいと云^いつてくれたんだ。おれは無^む論^{ろん}入^いらな^ないと云^いつたが、是^ぜ非^ひ使^しえと云^いうから、借^かりておいた。実^{じつ}は大^{だい}変^{へん}嬉^きしかつた。その三^{さん}円^{えん}を蝦^が蟄^じ口^{くち}へ入^いれて、懷^{ふところ}へ入^いれたなり便^{べん}所^{じょ}へ行^いつたら、すば